
艦魂年代史外伝 死の桜は咲かせない

黒鉄大和

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

艦魂年代史外伝 死の桜は咲かせない

【Nコード】

N6474C

【作者名】

黒鉄大和

【あらすじ】

戦艦「大和」、戦艦「武蔵」 二隻は日本海軍の象徴として生まれ、その壮絶な歴史を戦い抜いた。だが、大和型戦艦はこの二隻だけでなく、四隻いた。四番艦は計画中止で完成はしなかった。三番艦も建造途中で中止されたが、ミッドウェー海戦の敗北で失った空母補充の為に急遽空母として建造される事になった。様々な苦難を乗り越えて完成した大和型戦艦三番艦 空母「信濃」・・・だが、その命はあまりに儂く、短いものだった。今ここに、世界最大最強を目指して建造されたが、不幸にも完成直後に海に散る事にな

ってしまった空母『信濃』の艦魂と、一人の少年士官の繰り広げる、
短くも温かい物語・・・

(前書き)

今回は今までの二作と違ってスピノフ作品ではなくて完全オリジナル作品です。

大和型戦艦三番艦改造空母 空母『信濃』の短く儚い一輪の花のような物語です。

一人本編キャラが出ますが、それ以外の主役二人はこの短編だけのキャラです。

本編には名前だけ出た二人の若き命の物語・・・
気に入っていただけるのを願っております。

一九四四年十一月二八日、神奈川県横須賀湾から駆逐艦三隻を率いた一隻の超巨大空母が出撃した。

全長二六六・一m、全幅三六・三m、機関出力十五万三〇〇〇馬力、基準排水量六万二〇〇〇トン、最高速力二七ノットという前代未聞の世界最大最強の超弩級航空母艦 空母『信濃』だった。

大和型戦艦三番艦として建造されていた『信濃』は太平洋戦争開戦により建造を中止された。だが、一九四二年六月に起きたミッドウェー海戦で当時世界最強と謳われていた日本機動部隊の主力空母四隻が撃沈され、一瞬にして日本海軍は空母不足となった。

そこに白羽の矢が立ったのが『信濃』であった。

大和型戦艦の強力な防御力を使い、当時防御力の低いと言われていた空母に空前絶後の防御力を持たせた最強の空母を造る事が計画された。

それまでの日本空母とは次元の違う設計をされた『信濃』。

まず『信濃』はそれまでの空母よりも一・五倍くらい艦体が太い。これは戦艦として建造され、四六cm砲を装備するはずだった影響だ。

飛行甲板は強力な装甲が張られ、急降下爆撃に弱いという空母の弱点を克服。他にも米空母と同じ艦橋と煙突が一体化した巨大な艦橋を持ち、従来の空母とは艦容がまるで違かった。さらには当時日本海軍の空母はほとんどが密閉式格納庫だったが、『信濃』は前部半分を米空母と同じ開放式格納庫となっていた。ミッドウェー海戦の悪夢、格納庫内誘爆撃沈を避ける為だ。その重装備の犠牲として搭載機が従来の大型空母よりも四〇機も少ない四七機だったが、『信濃』は『洋上の飛行基地』としてその驚異的な防御力を生かして他空母の前衛で艦載機の燃料弾薬補給をする役目を持っていた。

空母『信濃』は全てにおいて日本空母の頂点を目指した設計であ

った。

さつそく建造再開された『信濃』だったが、その工事は壮絶なものだった。

日々悪化する戦局の中、損傷艦の修理に資材や時間が奪われ、『信濃』の建造は遅れた。さらには熟練工を兵役に取られたのがそれに拍車を掛けてしまい、一時期建造が中止された。

だが、そんな中でも海軍上層部は早く『信濃』を完成させたいと願い、当初一九四五年二月完成予定だった『信濃』を五ヶ月も早い一九四四年十月十五日に完成させよという無茶な命令を出した。その結果、工事は急ピッチで行われた。だが、進水式に単純なミスで外洋海水がドッグに流れ、『信濃』は水に流されて艦低先端部が壁に激突するという信じられない事故が起きた。熟練工のいない若者で無謀な工期短縮を行った結果であった。

結局、『信濃』はその事故で完成が一ヶ月も遅、十一月十九日に完成した。しかし、この事故で完成が遅れた『信濃』は世界最大と言われた日米海軍の総力決戦　レイテ沖海戦に参加できず、日本海軍唯一の大型空母『瑞鶴』もこの海戦で沈没した。

だが、完成した『信濃』も工期短縮に影響で一部手抜き工事がされていた。

軍艦の最大の脅威は魚雷だ。魚雷は水面下の艦体に穴を開けて海水をぶち込み艦を傾かせるのが特徴だった。『信濃』もそこは十分な工事がされていたが、その上である水面上の装甲は工期短縮で少し薄かった。

他にも機関部が不十分で最高速度二七ノットのうち一九ノットしか出ず、対空装備もほとんど装備されていなかった。

そんな状態だが、一応完成という形で残りの工事をしていたが、当時マリアナ沖海戦でマリアナ諸島を失った日本はそこから発進するB-29の爆撃で本土が焼かれていた。横須賀も空爆され、危険を感じた海軍上層部はすぐに『信濃』をまだ安全な広島県呉に行くよう命令した。

そんな経緯があつて、まだ十分とは言えない『信濃』は護衛の駆逐艦三隻を率いて敵潜水艦が出没する日本近海に飛び出たのだ。

海を翔ける超巨大空母『信濃』は他を圧倒する巨大さだった。

普通の空母なら揺れる波も『信濃』の前では小波同然でまったく艦は揺れなかった。他の大型空母の倍以上の排水量が成せる技だ。

そんな超巨大空母『信濃』の防空指揮所に、一人の少女が立っていた。

さらりと風に靡く長めのポニーテールは輝く黒色が神秘的な光を放ち、そこから見える整った顔は超が付く美形。大きな瞳と小さな鼻、桜色をした唇はとても柔らかそう。と言えば超絶美少女に聞こえるが、確かに少女は美形だが見た目はどう見ても十歳くらいにしか見えない。

そんな少女は黒い日本海軍の士官軍服を着こなしている。

軍艦に女がいるのは今でこそ普通だが、当時ではありえない事だ。そんな時代の軍艦になぜ少女がいるかと言つと 彼女は人間ではない。

彼女は艦魂。古今東西七つの海に伝わる船乗りの伝説。

艦魂は文字通り艦の魂であり、艦魂はその化身。言い方によつては精霊のようなものだ。

大小どの艦にも艦魂は宿る。それは皆若い女の姿をしていて、通常の間には見る事はできないのだ。

指揮所から曇った空を見上げる少女はこの空母『信濃』の艦魂なのだ。

少女 信濃は曇った空を見上げていた。

「処女航海がこんな天気とはな、残念だったな 信濃」

声を掛けられた信濃が振り向くと、そこには士官服を着たまだ若い少年が立っていた。

「直兄い？ どうしたの？」

信濃の小鳥のような弱い声が少年に向けられる。

直兄いと呼ばれた少年は「ちょっと風に当たりたくなつてさ」と答えた。

彼の名は長谷川直輝少尉。今年海軍学校を卒業したばかりの新人航海士だ。

直輝は信濃の横に付くと彼女と一緒に空を見上げた。相変わらず空は重い雲に包まれ、晴れる兆候は一抹もないが、風だけは冷たく吹き付ける。

「へくちゅっ！」

信濃は小さなくしゃみをして赤面した。そんな信濃を見て直輝は優しいな笑みをして自分の上着を信濃にそつと掛けてやる。

「直兄い？」

「寒いんですよ？ 風邪引くよ」

「艦魂は風邪なんか引かないよ。それより直兄いの方が・・・」

「僕は大丈夫。寒さには強い方だから」

「本当？ 無理してない？」

「してないよ。いいからそれを着てなつて」

直輝の優しさに信濃は嬉しそうに微笑んで「ありがと、直兄い」と感謝してそれを嬉しそうに着込む。

この二人、まだ出会って九日しか経っていないのに以前から仲のいい知り合いのような関係だった。

微笑み合う二人。だが、そんな二人の横で申し訳なさそうに声掛ける少女がいた。

「あ、あのお・・・お取り込み中すみません」

その声に信濃は赤面して急いで離れた。そんな彼女を直輝は不思議そうに見詰める。一方、申し訳なさそうにしている少女は信濃に敬礼する。

「貴艦の護衛を務めさせていただく第十七駆逐隊旗艦・駆逐艦『雪風』の艦魂です」

「ああ、護衛駆逐艦の。初めまして、ボクは信濃。知ってのとおりこの空母『信濃』の艦魂だよ。今回の処女航海の護衛、よろしくね」

「あ、はい・・・で、そちらの方は？」

雪風は不思議そうに直輝の方を見る。

「こんにちは。僕は長谷川直輝航海少尉って言うんだ。よろしくね」
「長谷川！？」

雪風は大声を上げて直輝を見ると、「ど、どつりでどこか似てると
思いました」と何か独り言を言う。

「え、えつとお、雪風？」

「あ、あの、失礼ですが長谷川翔輝航海大尉をご存知ですか？」

雪風は自分の知っているある士官の名を上げた。それに対し直輝
は瞳を開けて驚く。

「翔輝兄さんを知ってるの？」

「ご存知なんですか！？」

「うん。僕の従兄の兄さんだけだ」

直輝の説明に雪風は開いた口が閉じなかった。さらには信濃と直
輝を交互に見て「これもまた運命なんでしょうか？」と独り言を言
う。

「運命って何が？」

信濃が聞くと、雪風はようやく冷静さを取り戻した。

「実は長谷川翔輝航海大尉は私達日本海軍艦魂の中心的人物なんで
す」

「翔輝兄さんが？」

「はい。彼は現在捷一号作戦のけがで今は内地にいますが、彼が所
属する軍艦は戦艦『大和』なんです」

「お姉ちゃんに？」

「はい。すでに亡くなられた大和姉妹次女の武蔵さんを始め多くの
艦魂に好かれている方が長谷川大尉なんです。そして、その彼を最
も慕っているのがあなたのお姉さんであり私の直属の上官である大
和司令なんです。そんな関係のお二人の関係者であるあなた達が同
じ艦にいるなんて、運命ですよ」

雪風はそう説明すると仕事がありますからと言って去った。

残された二人は互いを見詰めて呆然としてる。

「直兄いの従兄さんがお姉ちゃんに乗ってるなんて」

「しかも他の艦魂達にも慕われている人だったんで」

二人ともあまりの出来事に完全に脳がフリーズしていたが、直輝は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「まあ、これも運命なんだよ。早く呉に行つて翔輝兄さんに会いたいな」

「ボクも早く大和お姉ちゃんに会いたいよ。武蔵お姉ちゃんはまだいないけど、呉に行つたら大和お姉ちゃんにいっぱい甘えるんだ」

嬉しそうに言う直輝と信濃。例え空が曇っていても、二人の笑顔は青空に照らされているように輝いていた。だが、

「・・・そう、呉に行つたら、ね」

そうつぶやいた信濃の表情は、暗く、悲しみに包まれていた。

その夜、信濃は誰もいない飛行機格納庫にいた。

必要最低限の明かりだけが灯された格納庫は薄暗かったが、結構遠くまで見渡せるほどの明かりはあった。

信濃は格納庫の奥に鎮座してある《ある物》を見詰めていた。それを見詰める彼女の表情は見た目に合わないほど苦しくゆがみ、悲しげに揺れていた。

「またここにいたのか」

そこへ現れたのは直輝だった。

直輝は微動だもせず立ち続けている信濃の横に寄る。その彼の表情も苦しげにゆがんでいた。

二人の前にある物、それは四〇機の飛行機だった。

「こんな物を作っちゃうなんて、今の日本は狂っちゃったのかな？」
「そうだね。狂ってる。この国は」

二人の苦しげな視線を浴びているのはプロペラも車輪もない、ロケットエンジンを積む謎の飛行機 特殊攻撃機『桜花』だった。

特殊攻撃機桜花。特殊攻撃機という名前は聞こえがいいが、本当

は飛行機でも何でもない。

桜花は一式陸上攻撃機の機体下部に取り付けられて空を飛び、敵艦隊直前で母機から切り離されてロケットエンジンを点火。音速を超える速度で敵艦隊に突撃し、パイロットは目標艦まで桜花を操縦し、そのまま敵艦に突っ込み、搭載された一・二トンの爆薬を起爆して敵艦を吹き飛ばす。通称『人間爆弾』と呼ばれる純粋な特攻兵器だ。

「母機から切り離されたら、二度とは帰れない死の桜・・・まるで散りゆく桜が、決して枝には戻らないように、一度天空に舞い上がったら、二度と大地を踏む事のない飛行機　それが桜花」

信濃は苦しそうに唇を噛む。

「今は神風特別攻撃隊が主役の時代。でも、特攻なんて自殺攻撃をするのは絶対にダメッ！　パイロットは自分の腕で敵を倒すものなのに・・・っ！」

「今の日本のパイロットは、もうそんな事はできなくなってる。だから、こんな狂った物を作っても敵を倒そうとするんだ」

二人の表情は苦しいまま。こんな物に乗って死地へ向かう搭乗員に対する悲しみ、こんな物を作るよう命令した者への怒り、そしてこんな物を使わないと戦えなくなってしまう愛する祖国への空しさ。それらが混ざり合った二人の顔は、苦しくゆがみ続ける。

「もし、ボクが呉に行かなければ・・・こんな物に乗って飛び立つ搭乗員はいなくなる。ボクが呉に行かなければ、こんな物を空に飛ばさずに済む。ボクが呉に行かなければ　」

「信濃ッ！」

自分を責める信濃に、直輝は一喝する。その彼の表情は怒り一色に染まっていた。

「それ以上自己犠牲を吐いたら本気で怒るぞ。翔輝兄さんが言っていた。死んだらもう二度と戻っては来ない。だから、例え何があっても死ぬなんて考えず、自分の命を大切に、今は生きろって。お前にはそれを何度も聞かせただろ!？」

「そんなの関係ない！ 例え直兄いが何て言っても、ボクはこんな物を運ぶくらいなら死んだ方がマシなの！」

「このわからず屋！ もういいっ！ そんなに死にたいなら勝手にしろ！」

直輝は信濃を突き飛ばした。

「直兄い ツ！」

その時、信濃は見た。

直輝が、今まで以上に苦しそうに顔をゆがめ、泣いているのを・

直輝はそのまま格納庫を飛び出し、戻って来る事はなかった。

直輝とケンカ別れした信濃は防空指揮所にいた。

星空を見上げる信濃の表情は先程桜花を見詰めていた時よりも悲痛にゆがんでいた。

「直兄い……」

毎夜二人はこの防空指揮所で他愛のない会話をするのを日課としていた。だが、先程直輝とケンカ別れしてしまった今、指揮所にいるのは信濃ただ一人だった。

「直兄い……来てくれないのぉ？」

信濃の瞳から涙が流れる。

信濃にとつて直輝は頼れる兄のような存在だ。そんな彼とケンカ別れしてしまった事を、彼女はひどく後悔していた。

「直兄いの言うとおり……でも、ボクはこんな兵器を運びたくない。青空に飛ばしたくないんだよぉ」

泣きじゃくる信濃は何度も何度も袖で涙を拭う。その度にゆらゆらと揺れる長いポニーテールはとても悲しげに揺れる。

桜花 それは決して生還を許さない死の桜。

そんな恐ろしく悲しい兵器を自分は運んでいる。もし、このまま呉に着かなければ、桜花をこの空に飛ばす事もないのだ。

そんな事ばかり考えてしまい、信濃は愕然としてその場に崩れる。

「大和お姉ちゃん・・・武蔵お姉ちゃん・・・ボク・・・一体どうしたらいいの？」

星空一つ見えない空を見上げ、信濃はまだ見ぬ姉と、もう会えぬ姉に考えを仰いだ。だが、返答などある訳もなく、信濃は再び愕然とする。

信濃は後から後らか溢れてくる涙を拭いながら立ち上がった。

「直兄いを捜そう・・・」

信濃はそう言って振り返った。その瞬間、

ズドオオオオオオオオオン・・・ッ！

「ぐはっ！」

突如鈍い爆音と振動が響き、巨艦「信濃」は大きく揺れた。同時に信濃の横腹が裂けて鮮血を飛ばし、信濃は大量の吐血を吐いて倒れた。

真っ赤に染まった信濃はしばらく何が起きたのか全然わからなかった。だが、顔を真っ青にした雪風が現れて状況を説明されると、ようやく理解した。

自分は所在不明の敵潜水艦の雷撃を受けたのだと。

雪風はすぐに敵潜水艦を追撃する為に消え、三隻の駆逐艦のうち「雪風」ともう一隻が闇夜に消えた。

この時「信濃」は四本の魚雷を右舷に受けていた。だが「信濃」は大和型戦艦の強力な艦体を持っている。たかが魚雷四本程度で沈むような空母ではない。事実、大和型戦艦二番艦・戦艦「武蔵」は魚雷二〇本、爆弾二〇発以上受けて沈没したという驚異的な記録が残っている。それが空母「信濃」の防御力だった。

だが、状況はそんなに甘いものではなかった。

先に説明したが、水面下は完璧な防御がされていたので魚雷の影響は少ない。はずだったが、この時敵潜水艦はより転覆しやすいように海面ギリギリで魚雷を放ち、通常よりも高い位置に魚雷が命中した。そこは水面下と水面上の境界線付近で、炸裂した魚雷は水面上手抜き装甲を破壊。そこから大量の海水が艦に流れ込んできて

いた。

空母『信濃』艦長阿部俊雄大佐はすぐに海水侵入を防ぐ水密扉を閉め、さらに注排水装置で左舷注排水区画に注水命令を出した。だが、まだ若すぎる乗組員はその作業を思うようにできず、さらに被雷で手抜き工事された艦内はほんの少しゆがみ、一部水密扉が開閉不能になっていた。

この信じられないような次々のアクシデントで艦内は大混乱。海水はさらに『信濃』の艦体を飲み込んでいった。

超巨大空母『信濃』は、右に大きく傾斜したまま海に浮かび続けた。

被雷六時間後、ついに復原不能になった『信濃』。この二時間前に阿部艦長が総員退去を命じていた。

一方、防空指揮所で横たわる信濃はもはやぐったりとしていき込んでいた。傷はたいした事ないが、艦内に浸水した海水が人間で言う病原菌のような役割をし、信濃は高熱と咳きに苦しめられていた。

信濃がもはや自分の命の限界を感じた頃、指揮所に誰かが来た。

「信濃……」

それは 血まみれの直輝だった。

「直兄いつ！ ど、どうしたの！？」

驚く信濃の目の前で、直輝は倒れた。自分も苦しい体だったが、信濃はそれを引きずって直輝に近づく。

「直兄い……っ！ しっかりして！」

信濃が直輝を抱き締めると、直輝は薄く目を開けた。

「信濃……」

「直兄いつ！ 一体どうしたのそのけが……っ！」

「……お前を助けようと……艦内を走り回って水密扉を閉めたり……注排水装置を手動で動かしたりしてただけ……その時崩れて来た瓦礫の下敷きになって……こんなざまだよ」

頭から血を流す直輝は小さく笑った。そんな彼を見て、信濃は泣いた。

自分なんかの為に、ケンカした相手なんかの為に命懸けで走り回り、大けがを負った。そんな彼を、信濃は強く抱き締める。

「信濃？」

「直兄い・・・ごめんね・・・ボクなんかの為に・・・」

「バカヤロー・・・お前だからやったんだ・・・それ以上言っな」

直輝の言っとおり、信濃はもう何も言わずに直輝を抱き締めた。

抱き締められている直輝は抱き返してやりたかったが、もうそんな力は残されていないかった。

「やっべえ・・・お前の顔が・・・だんだん・・・見えなくなっ
て・・・」

「直兄いつ!? しっかりして直兄いつ　ゲホゴホッ！」

信濃は大量の吐血を吐いた。

「・・・信濃・・・大丈夫か？」

「私は平気・・・それより直兄の方が・・・」

「もう僕は助からない・・・お前と一緒にこの海に散るよ」

「直兄い・・・っ！」

自分を抱き締める信濃を、直輝は残った力を振り絞って抱き返した。

「・・・悪いけど・・・一足先に・・・逝ってるよ」

「だ、ダメッ！　直兄いつ！　直　」

直輝の瞳は閉ざされ、二度と開く事はなかった。だが、その表情は何か満足したような、優しげな笑みを浮かべていた。

信濃はしばらく嗚咽をしながら泣いていたが、涙を拭いて直輝の唇にそっと自分の唇を重ねた。

顔を上げた彼女の顔は涙でぐしゃぐしゃだったが、彼女が今できる最高の笑みを浮かべていた。

「直兄い・・・待っててね・・・後からちゃんと逝くから」

信濃はそう言い、真っ暗な空を見上げた。

「大和お姉ちゃん・・・一目でいいから・・・会ってみたかったなあ」

そうつぶやき、信濃は再び直輝と体を重ねた。

その瞬間、『信濃』は急速に右に倒れ、そのまま横転。ゆっくりとその巨体を海に沈めた。

空母『信濃』、大和型戦艦三番艦として建造され、途中超巨大空母に路線を変更して建造され完成した日本海軍最後の希望だったが、無理な工事と兵員の不十分さが受けた魚雷の対処を遅らせ、その巨体を海に沈める羽目になった。だが同時に少女の目的だった桜花を使用不能にさせる事はできた（ただし、その後桜花は実戦に投入されたが敵艦隊到達前に母機群が全滅されたり、例え突入しても大きな戦果は挙げられなかった）。空母『信濃』は世界軍艦史上最短記録のわずか十日の命を追え、日本近海にその巨体を永遠に沈めた

(後書き)

今回は完全オリジナル短編です。

空母『信濃』のあまりに短き十日の命は、決して無駄ではなかったと思いたいですね。

もし何も問題なく完成していれば、レイテに間に合う事ができ、少しは歴史が変わっていたかもしれません。

今もなお『信濃』は海の底で永遠の眠りをしているでしょう。

さて、次の作品はまたもやメインキャラによるスピノフ作品です。

今度の主人公は今回も出てきた駆逐艦『雪風』のお話です。

ただし、今度の作品はちよつと違い、戦後のお話になります。

戦後戦時賠償艦として中国に渡された『雪風』は新しい名を付けられて仲間が一人もおらず、敵だらけの中国で生きる事になります。中国海軍の艦魂達とどうやって分かち合い、生きていくのか。

太平洋戦争、朝鮮戦争と二つの戦争を翔け抜けた奇跡の幸運艦『雪風』。

その壮絶な歴史の最期は、あまりにも悲しきものでした。

そんな『雪風』の最期を描いた次回作、どうかお楽しみに。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6474c/>

艦魂年代史外伝 死の桜は咲かせない

2008年8月29日18時57分発行